③ 河内の鉱泉

河和田の谷のつきあたり、上河内の庄谷は鉱泉が出る。河内の湯といって、数年前まで鉱泉宿があった。ここ庄谷は岩の切れ目から炭酸ガスがふき出して赤茶色の水がよどんでいた。そのあたりでは、みみずや蛙や蛇が死ぬので地獄谷といわれて、みんなおそろしくて近よらなかった。

ところが江戸時代も文政（一八一八～一八三〇年）のころ、かしこい村人が、この水はもしかして霊水かもしれないと思い、わかした湯に入ったらほんとうによく効いた。

それでお湯屋をひらいたら、とても繁盛したのだが・・・・。山の奥で一人だけいい目をみると、自然とひがむ人も出て来て、二十年ほどでやめてしまった。

また時がたって、明治の中ごろに上宇坂（美山町）からやって来た旭さんがお湯屋を再開した。お客さんを呼ぶのに、赤い帽子をかぶり、杖に鈴をつけて、福井や武生の町へ宣伝にいった。この湯は万病に効いた。特に胃腸病や神経痛に効いたので、まもなく一年に一万数千人も湯治に来た。関西や名古屋あたりからもやって来たので、宿も二ケ所にふやした。鉱泉は赤茶けた炭酸

泉で、湯がわくと鐘をならした。蒸気機関車の釜で湯をわかして汽笛を鳴らした時代もあったそうだ。

お湯をわかすと、「湯の花」が浮いたので、それをこしてお客に配ったりした。名物には「湯の花せんべい」があった。

いまも湯屋のそばの山すそに小さなお堂があって、薬師如来がまつってある。お湯につかって汗を出してから、お堂の前で、ゴボゴボと音をたてながらわき出しているすっぱい水を飲むとまたからだにいいから・・・と、ビンにつめて持って帰って、さあ飲みましょうと思うと、もう元の味ではない。まん前には、水をかけられて結晶がびっしり垂れ下がった白茶けた石が立っている。お不動さまである。七十年前には、その姿かたちがわかったのだが、今では想像するしかない。